

藤井寺市

偉大な先人からの贈り物
いのまなり
 ～遺唐留学生「井真成」を新たな市のシンボルとしたまちづくり～

背景

昨年の11月に本市にとっては衝撃的なニュースが流れました。77年間の歴史を持ち、市民に愛され続けた藤井寺球場が閉鎖されることになったのです。

全国どこへ行っても、「どちらから来られましたか。」と聞かれ、「大阪府の藤井寺市です。」と答えれば、「あー、あの藤井寺球場のあるところですか。」と多くの方から言われたものでした。

まさに市のシンボルと言える藤井寺球場閉鎖のニュースは、本市にとって大きなショックであるとともに、市の活力が失われるのではないかという危機感が市民の間に広がりました。

すでに、近年、市内からは大規模小売店や企業の撤退が相次いでおり、追い討ちをかけるような藤井寺球場の閉鎖は、今後の藤井寺市の活性化を考える上で大きな課題となりました。

しかし、時期をほぼ同じくして、遙か中国大陸から、ひとつのニュースがもたらされました。中国の古都・西安市の郊外で「井真成」という名の遺唐留学生の墓誌（金属や石に亡くなった方の功績などを記したもの）が発見されたというニュースです。その後、この墓誌に関する研究が進み、井真成の故郷が藤井寺市である可能性が高いと報道されたことをきっかけに、にわかに市内での動きが活発になってきました。

「ひょっとしたら藤井寺球場閉鎖後に、井真成が新たな市のシンボルになるのでは…」という思いが、市民の間に静かに浸透していきました。

経過

このような機運を受けて、市民の手による井真成

に関する研究会が発足し、この研究会と各種団体で構成された「井真成市民シンポジウム実行委員会」との共催により、シンポジウムが開催されました。

本市としても、市の活性化を考える上で、井真成が起爆剤になるのではないかと考え、大阪府などと共に訪中し、墓誌の藤井寺市への里帰りを中国側に要請しました。

このような努力により、墓誌里帰り展示が実現に向け、大きく前進したのですが、課題はまだまだ多くありました。

墓誌の里帰り展示だけでは、市の活性化には繋がらず、関連した活性化事業を総合的に展開する必要があり、また、関連事業を計画するにしても行政だけが企画立案するのではなく、市民や各種団体、事業者との協働体制がなければ、真の意味での元気な藤井寺市は創れない。さらには、厳しい財政状況の中で、これらの事業費をどのように確保するのか、ということでした。

このような課題に対して、市内各種団体により「遺唐留学生『井真成』墓誌里帰り実行委員会」が設立され、市との協働により墓誌の里帰り展示とそれに関連する市の活性化事業に取り組みました。また、「全国都市再生モデル調査」として国からの補助を得るとともに、市民からの寄付を募り、事業費の確保を図りました。

このようにして、井真成の墓誌と魂を迎える準備が着々と進みました。

主な取組

事業のコンセプトを、「本市の豊富な歴史遺産を全国に情報発信するとともに、子どもたちに遺唐使の学習を通じ郷土愛を育み、国際交流への理解を深め

る。また、豊富な歴史遺産を活用した観光・商工業の振興を図り、市の活性化を目指す。」とし、昨年10月から12月にかけて、井真成関連の事業は実施されました。

「井真成ウォーキング～ゆかりの地を訪ねて～」（写真1）では、市内に豊富に存在する井真成ゆかりの社寺や遺跡に多くの方が訪れました。また、「藤井寺フォーラム～井真成の墓誌が語るもの～」（写真2）では、約500名の参加者を得て、井真成の墓誌に関する講演とパネルディスカッションを実施しました。

メインの事業となる「遣唐留学生『井真成』墓誌特別展」は12月2日から11日にかけて、アイセルシユラホール（藤井寺市立生涯学習センター）で開催されることが決まり、開催前日の1日には、実現することのなかった井真成の里帰りを、当時の時代装束をまとった50名により再現した「井真成里帰りパレード」（写真3）を実施し、約1,000名の方が井真成の里帰りを祝いました。

このようにして迎えた墓誌特別展では、新たに作成した井真成に関する学習資料によりあらかじめ学



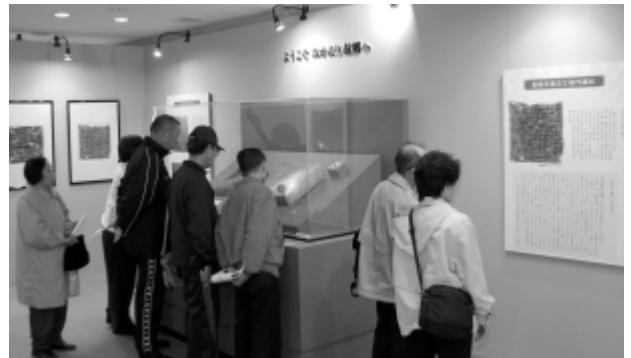
（写真1）



（写真2）



（写真3）



（写真4）

習した小学生をはじめ、10日間で10,000人を超える来館者があり、新聞やテレビでも報道され、藤井寺市の名前が全国に情報発信されました（写真4）。

今後の展開

昨年は、井真成一色でまち全体が盛り上がった年となりましたが、このような取組は継続してこそ、市の活性化に繋がるものと考えています。

そのような意味からも、本年は、市民や事業者と共に墓誌のレプリカの作成・常設展示や、井真成パレードの継続実施、中国西安市との新たな交流など、あらゆる方面から検討を加え、市の活性化に取り組んでいきます。

約1,270年前に遠く異国の地で亡くなった井真成という歴史上の人物を活用し、市が発展していくことが、偉大な先人からの贈り物を活かすことになるのではないかと考えています。

